

## 叱る(い)と

## 東

野圭吾の小説に『新参者』という作品がある。その中で、とても印象に残った一行があった。「可愛がることと大切にすることは違う」この短いセンテンスが、私の胸の中にストンと落ちた。

近頃の子ども達は、極端に叱られることを嫌う。朝日新聞に「Heroes」挑戦者たち」というコーナーがある。毎回、各界で活躍している人達から、その人の生き方や思いをインタビュー形式で聞き取り紹介する記事である。そのVOL・100で小柳友（俳優24歳）ゆとり教育を受けた世代）がこう言っていた。自分達は、「叱られるのが極端に苦手な世代。僕も前は叱られるのが嫌いでした。でもこの仕事に就いてからは慣れた（笑）。何よりも人を叱るってエネルギーを使うこと。それを自分のためになさしてくれているのに、変わらなかつたら申し訳ないと思う。今は、叱ってくださった方にはむしろ感謝します」（原文ママ）

叱られることが好きな人は、誰もいないだろう。しかし、叱られないで一生を終わる人など何処にもいない。

## 曾

野綾子の小説『虚構の家』だったと思うが、芝生の中に入って警察官に叱られた少年が、それに抗議するために自殺を図ったというものがあつた。それを読んだ当初は、そんなことはないだろう小説の中の出来事だろうと思っていた。しかし、近年、実際にそのようなことが世の中で起きているという話やニュースを時折耳にする。少し以前のことだが、父親が金属バットで殴って自分の長男を死に至らしめたという事件があつた。内容はこうだ。

## 或

ある日、中学一年生の男子が、原因は分からないが、先生に叱られたことで「死にたい」と言った。それからしばらくして、その男子の子は朝起こしに来た母親を殴った。それが発端で家庭内暴力が

エスカレートしていったという。母親と姉は家を出て暮らし、息子と父親が残った。夜中に息子が急に帽子が欲しいと言った。父親は夜の街に買いに出たが、息子の気にあう物ではなかった。息子は父親に土下座して謝らせた。父親は、息子の意のままに従った。それには、理由があつた。父親は精神科医に相談していた。その医者は「そのようにこき使われたいことは、今は技術として必要と考えるべきです」と助言した。ある本の手記を読んだ。そこにこんなことが書かれてあつた。「徹底的に殴られてごらん下さい。何回殴るか、勘定してごらん下さい」父親は、息子の暴力と我が儘を全て受け入れることが大切だと思つたという。彼はまた、ラジオの教育相談で有名な心理カウンセラーを訪問して助言を仰いだ。しかし、具体的な助言は得られなかった。或る夜、息子に言われた深夜番組を録画して父親が寝たのは午前二時半過ぎだった。翌朝、何時ものとおり七時に起こさなければならぬ。息子が朝風呂に入るためだ。しかし、そんな生活がしんどくなつていた。七時を一分でも過ぎて起こすと息子は非常に暴れる。時計の針は既に七時一分を過ぎていた。父親は、その一分に押されるようにして、熟睡している息子の頭を金属バットで殴り縄跳びの紐で首を絞めて殺した。

## 悲

惨な事件である。親は、子どもが理不尽なことをしたりルールやマナー、モラルに反した時は毅然として叱らなければならぬ。それは教師にも言える。今の世の中、子どもを叱れない大人が多い。それは、何故か大人達は今すぐ深く考えなければならぬと思う。

（元青森県立北斗高校校長）